

ナチュラルキス4

目次

ナチュラルキス4

5

一生の宝物

269

ナチユラルキス4

お泊りに行ったときに、髪をぬらし、パジャマをセクシーにはだけさせた佐原にどれだけドキドキさせられたか……

いまも佐原にはドギマギさせられっぱなしだし……

こんなんで、ほんとに結婚なんてできるんだろうか？

今夜佐原が彼女の家に泊まることになったのは、母の計らいだった。結婚することで、沙帆子の生活は一変することになる。これまで両親に学費を出してもらったことも、お小遣いをもらうことも当たり前だと彼女は思っていた。だけど、結婚したら、両親に払ってもらったものも、佐原に払ってもらったものもおかしい気がして……ものすごく心が不安定になってしまったのだ。

そんな娘の心情に母は気づき、今夜、佐原とじっくり語り合う時間を作ってくれた。

おかげで、ちゃんといまの自分の気持ちを佐原に伝えることができて……怒られてかなり恐かったりもしたけど……ずっと心に巣食っていた不安は消えた。

それにしても、佐原先生……今夜、どこで寝るのかな？

居間？ それともわたしのベッドの横に、お布団を敷くのかな？

だが、母は居間でくつろいだまま、いまだに布団の準備をしない。いったいどうするのか、母に尋ねてみたいのだが、どうしても口に出して聞けず、ちっとも落ち着かない。

沙帆子は床をじっと見つめた。

先生、髪を洗うかな？

前髪にすぐがついてたりしたら、心臓がキューンと縮んで、そのまま止まっちゃいそう……

沙帆子の脳裏に、ふいに上半身裸の佐原が浮かび上がった。

うわお、ダメダメダメ！

半裸の佐原を頭から追い出そうと、沙帆子は躍起やっきになって頭をぼかぼか叩いた。

叩きすぎて頭がジンジンする。彼女はいくぶん惨めな気分になりながら、ベッドにひっくり返ってため息をついた。

何やってんだ……わたし……

沙帆子は身体の力を抜き、ベッドのスプリングを全身に感じながら天井を見つめた。

「沙帆子」

ノックの音と同時に母の声が聞こえ、沙帆子は慌てて起き上がった。

「な、何、ママ？」

「啓史君、お風呂上がってたわよ。入ったら」

「あ……う、うん」

沙帆子は急いで立ち上がり、クローゼットを開けた。佐原のところにはほとんどの服を運び込んでしまったために、この部屋と同じで空間ばかりが目立つ。沙帆子は、空間から目を逸らし、着替えのパジャマに手を伸ばした。

やはり、今夜はこのパジャマを着るしかないのか？

以前佐原にお披露ひらび目したイチゴ柄のパジャマは、間の悪いことに洗濯に出してしまっている。昨夜着て寝たイチゴ柄のパジャマを、今朝、洗濯カゴに入れるのを忘れてしまったのだ。

朝、カゴに入れておけば、今日のうちに洗ってもらえたのに……

この真っ赤なリング柄のパジャマは、あのイチゴ柄より子どもっぽい。もっと古いのならまだあるが、それも似たり寄ったりのお子ちゃま柄だし、それらを着るくらいなら、まだこのリングのパジャマのほうがよさそうだ。

ラブな普段着を着てもいいのだが、佐原がいるからいつもと違うことをするのって……逆に勇氣がいるというか……

沙帆子はため息をついた。

クローゼットの中を改めて見回した彼女は、あるものに視線を止めた。

母がお泊りのときに持たせた、エロっちいネグリジエ……引越しの荷物に詰められなくて、ここにあるわけで……

沙帆子はブンブン首を振った。もちろんこんなの、論外だし。

またノックの音がした。

せ、先生？

「開けていいか？」

「は、はい、ど、ど、どうぞ。ですっ」

慌てふためいた沙帆子は、ボックスから闇雲に下着を掴み出し、パジャマの中に丸め込んだ。

「早く、風呂に行つてこい」

ドア口に現れた佐原が命じるように言う。

「は、はい。行きます。す、すぐ」

佐原に目を向けず、沙帆子は急いで振り返った。だが、手にしているパジャマのことを思い出した彼女は、焦りまくってそれを後ろ手に隠し、それからやっと佐原に顔を向けた。

うっ、おっ！

先生、か、髪洗つてるし……

し、しづくが……しづくが……前髪についてたり……す、するし……

風呂上がりでセクシーすぎる佐原がすっと歩み寄ってくる。沙帆子はドギマギして彼を待ち受けたが、佐原は腰を屈め、床に手を伸ばした。佐原が掴もうとしているものを目にして、沙帆子は目を剥いた。

パ、パンティだ！

知らぬ間に床に落としたらしい。丸まっているので、まさかそれがパンティだとは、佐原は気づいていないに違いない。

「そ、それは、ダ、ダ、ダメッ！」

沙帆子はパッと屈み、手にしたパジャマでパンティを押さえ込んだ。

「リングか……」

「は、はい」

佐原の言葉に対して、なんでか床に正座し、お辞儀しながら返事をしている自分がいた。

わたしってば、馬鹿みたい……

火を噴きそうなほど顔が熱かった。

真っ赤になった沙帆子は、パンティをパジャマに巻き込んで拾おうと苦心した。

「真っ赤だな」

からかいのない静かな声で、佐原が言った。そして沙帆子の前にしゃがみ込んできた。

「は、はい。パジャマ……こ、こんなのしかなくて……」

彼女は萎しおれて答えた。

佐原が小さく吹き出した気がして、沙帆子はちよつとだけ視線を上げた。

目の前に、シックな黒いパジャマを着て床に片膝をついている佐原の顔があった。

あまりに至近距离で、トクトクと鼓動が速まる。

佐原の手がすつと伸びてきた。

彼の長い指の先が、彼女の前髪をそつと揺らし、沙帆子は身体の芯がぞくりと震えた。

佐原の眼差しは、何か言いたげに沙帆子を見つめてくる。その眼差しの強さに、心臓が派手に暴れ始めた。

「ほら、風呂入れ」

彼女の頭のとつぺんをぼんと叩いて佐原は言うど、沙帆子のドキドキに肩透かしを食らわし、すぐに立ち上がった。

佐原は、物足りなさに沙帆子が指を唾つよえたくなるほど、あっさりと部屋から引き上げていった。

2 カメラマン魂

なんかなあ〜。

湯船に浸かり、風呂のふちに顎あごを載せながら、沙帆子は心のうちでひとりごちた。

「佐原先生……キスするのかって思ったのに……」

や、やっぱり……あのガキンチョパジャマを目にして、呆れたんじゃないかな？

真っ赤だ……なんて……やたらしみじみ口調だったけど……あれって、こいつほんと色気がねえなあなんて、思ったりしたんじゃない。

沙帆子のパジャマや下着は、みな彼女の好みで選んだものだ。もちろん可愛いのが気に入って買ったのだが、いまは、どれもこれもあり得ないほど子どもっぽく思えてならない。

「わたしってば、少しは大人っぽいを買つとけばよかったのに。下着もピンクのチェックとか、リボン柄とか……あんな幼稚な柄ばっかりじゃなくて……」

唇を尖とがらせて自分に不平を言ったものの、言っただぶんだけ虚しさに囚とらわれた。

沙帆子は、お泊りのときに母が持たせた、あの行き過ぎたセクシーネグリジェと下着を思い浮かべた。

ああいうの方が、佐原先生……嬉しいのかな？

思わずそう考えたものの、大胆すぎる考えに頬が熱く燃えた。
でも……やっぱり……そうかも。

先生、さつき、何を考えてわたしの前髪に触れてきたんだろう？

あの眼差しには、どういう気持ちが入められていたのだろうか？

佐原が何を考えているのか、ちっともわからない。

いつか、彼の思いを理解できる 때가来るのだろうか？

沙帆子は風呂の一点をじつと見つめた。

ずつと……

ほんとのほんとに……ずつとずつと、佐原先生と一緒にいられるのかな？

沙帆子は胸に湧いた不安を含んだ疑問を、無理やり心の隅に押しやった。

風呂から上がった沙帆子は、身体を拭き、諦めてリング柄のパジャマを身につけた。

ドライヤーで髪を乾かしながら、先ほど目にした風呂上がりの佐原を思い浮かべる。

すっごいセクシーだった。前髪にしくががついてて……

沙帆子は自分のリング柄を見下ろし、決意を固めた。

よしっ、明日は学校の帰りに、もつと大人っぽいパジャマを買うことにしよう。佐原先生の好き

そうなやつ……

けど、先生の好みって、どんなのさ？

真つ赤なお子ちゃまパジャマを着た姿で、佐原がいるだろう居間に足を向けるのは、実に気後れすることだった。それでも、そのまま自室に引きこもって寝るわけにもゆかない。彼女は自分^し叱^たしつつ、居間へと戻った。

「沙帆子ってば、遅いわよお」

「沙帆子。ここに」

小言のような母の言葉のあと、佐原が命じるように言った。

お子ちゃまパジャマ姿を、佐原の目に完璧にさらした事実^に、彼女は顔を赤らめてもじもじした。

「沙帆子？」

「どうした？ 早く座れ」

幸弘と佐原が同時に言った。

どうやら佐原は、沙帆子が気にするほどには、彼女のお子ちゃまスタイルを気にかけていないようだった。むつとする思いとほつとする思いを抱えつつ、沙帆子は佐原の隣に座り込んだ。

「えっ？」

佐原の膝の上に置かれているものが目に飛び込んだ途端、沙帆子は驚きの声を上げた。

「そ、それ。ど、どうして？」

顔を引きつらせ、沙帆子は父に険しい目を向けた。

佐原が膝に置いているのは、まぎれもなく沙帆子のアルバム……

だが、こいつは、子どもの成長記録というような、ほのぼのとしたアルバムとはわけが違う。「パパってば、な、なんでいま、これを出してくるのよお」

「なんでって、啓史君が見せて欲しいって頼むからさ」
「なにやしつつ、幸弘は言う。すこぶるご機嫌な様子だ。」

そりゃあそうだろう。このとんでもないアルバムを、自慢の種にしている父なのだ。

「見なくていいっ！」

沙帆子がアルバムに手を伸ばした途端、アルバムが遠くに逃げた。

「先生、見ないで、お願い！」

沙帆子は、両手を必死に合わせて、アルバムを差し上げている佐原に懇願した。

「なんで、見ちゃいけない？」

「な、なんでって。だって、これはですね。……アルバムというようなものじゃなくて……」

佐原は沙帆子の言葉に眉をひそめ、幸弘のほうを見た。

「そうなんですか？」

「そんなことあるもんか。これは沙帆子の成長を詳細に記録したアルバムだよ。沙帆子は、自分のちっこい頃の写真を見られるのが恥ずかしいだけさ」

幸弘は沙帆子の抗議の睨みをすんなりかわし、そのまま佐原に向かって話し続ける。

「啓史君、自慢じゃないがね、僕はカメラマンとしての素質がかなりあると思うんだ。ほら、沙帆子も来たことだし、開いて見てくれ。きつと君も気に入るよ」

自慢じゃないって、すっかり自慢して行くせいで。

齒を軋きらせながら、むかつく父に睨みを向けていた沙帆子は、アルバムを開こうとしている佐原に気づき、思わずアルバムに飛びついた。

「や、やっぱ、ダメです！」

「お前な。俺には見せられないってのか？」

佐原の鋭い睨みにびびった沙帆子は、アルバムを掴んでいた手をパッと離して身を引いた。

「そ、そういうんじゃない、な、なくてですわね」

アルバムは無情にも、沙帆子の目の前で、佐原の手によって開かれた。

沙帆子は思わず呻うないた。

いつの間にも移動したのか、幸弘は佐原の座っているソファの肘掛けに手をつき、愉悦の混じった表情でアルバムを覗き込んでいる。

「これは？」

一番はじめのページには、大きく引き伸ばされた写真がドドンと貼つてある。

普通サイズの写真を想像していたのであろう佐原を、かなり驚かせたようだった。

それにしても、この写真……久しぶりに見てしまった。

「この世に、生を受けたばかりの沙帆子だ。といっても、三時間くらい経ってるな。生まれてすぐは、嬉しさに舞い上がっちゃってねえ。カメラのことなんかちっとも頭に浮かばなくて……」

横で説明し続けている幸弘の言葉を聞いているのかいないのか、佐原はじつと写真を見つめてい

まるで、おさるさんのごとき、くしゃくしゃ顔の赤ちゃんだ。

いまとは似ても似つか……

「面影……ありますね」

へっ？

に、似ても似つかぬこの写真の、ど、どこに……わたしの面影があるというのか？
かなりシヨックだった。同時に腹が立った。

佐原は何を見て、そのおさるのような赤ちゃんが、沙帆子に似ていると言うのだ。

まあ……確かに本人なのだが……

彼女は佐原にうらめしげな目を向けたが、彼は気づきもしない。

「だろ？ 生まれたての沙帆子はね、まじで天使だったよ」

て、天使とな？

沙帆子は、父の言葉にいたたまれず、顔を歪めた。

さすがに天使はないだろ……どう見ても、おさるさん以上じゃないし……

天使とおさるのギャップはなはだしく、猛烈に抗議したい気分に乗られる。

キッチンでカチャカチャ音をさせていた芙美子が、トレーにグラスを載せてやってきた。

「はい。啓史君、どうぞ」

芙美子はグラスのひとつを、佐原の前に置いた。

「ありがとうございます」

佐原は頭を下げてグラスを手を取った。漂う香りからしてワインのようだ。

芙美子は同じものを幸弘に手渡し、沙帆子には可愛いチューリップの絵柄のマグカップを差し出してきた。カップの中身はホットミルクだった。

沙帆子以外の三人は、決まりごとのように、ワインのグラスを軽く差し上げ、それぞれ液体を口に含んだ。お酒の効果なのか、しみじみと満足そうな表情になった三人を目にして、仕方のないことなのに、彼女はやたら疎外感を味わった。

真つ赤なリング柄のパジャマに、ホットミルク。まるきりお子ちゃまだ。

なんだか喉が詰まった。

できることなら、思い切り地団太を踏んで、この憤りを、大人の三人に見せつけてやりたい。

もちろん、そんなことはけしてできないが……

グラスをテーブルに置いた佐原は、またアルバムに目を向けた。

そんな真面目な顔で見ないで欲しいのに……

次のページを開いた佐原の反応は、だいたい予想できるし……

「どう、啓史君。沙帆子、可愛いでしょ？」

「ええ」

どこか上の空で返事をしつつ、佐原はついにアルバムをめくった。

沙帆子は思わず息を止めた。

「これは……すごいな」

佐原の言葉に、沙帆子はぎゅっと目を瞑った。

「だろ。僕は、美味しいシャッターチャンスは、けして逃がさないんだ」
にやにや笑いながら幸弘は胸を張る。

アルバム最初の数ページは、幸弘の会心の作ともいえるべき写真ばかりを選りすぐった、ダイジエスト版になっているのだ。

赤ん坊の沙帆子が、まるで、あかんべえをしているように写っている写真……
ちっこいベビー用の椅子に横向きに座り、ぐうたらな親父のような表情と仕草で、お尻のあたりを搔いているように見える写真……

どれもこれも、そんな感じなのだ。

「幸弘さんの撮る写真って、ほんと、面白いの多いわよね」

「写真は、静と動の混在でなくちゃならないんだよ」

意味がわかるようでわからないことを、得々として語る父に、沙帆子はふてくされた。

「これは、どうしたんですか？」

「ああ。そいつはね。生まれて六ヶ月くらいの頃だ。その頃の沙帆子は、お座りして泣き出すと、足をばたばたさせるんだけど……どうしてなのか、お座りしたままバックしていくんだ。器用だろ？」

沙帆子は頬を膨らませた。器用と言われても、まったくもって嬉しくない……

佐原の顔に、理解の色が滲み、口元には微かな笑みが浮かんだ。

わたし、佐原先生に、わ、笑われている……

「そうか。それじゃ、こっちの写真は、座ったままバックしてて、柱に激突した瞬間ってわけですね？」

わざわざそんな説明を口にした佐原を、沙帆子は拗ねて睨んだ。が、むしろくしゃすることに、まったく気づいてもらえなかった。

「そうなんだよ。そのとき、こーんな大きなたんこぶがでちゃってねえ。ほんと、心配させられたよお」

なーにが心配だ！

もう黙っていられない。

「パパ。あとで心配するんじゃないかって、普通は柱に激突する前に、娘を助けるもんじゃないの？」

沙帆子は、父に向けて怒りを飛ばした。なのに幸弘は、平然として娘の激怒を受け流す。

「激突するなんて、その瞬間が訪れるまで思わなかったんだよ。僕だって、柱に激突するとわかっていれば、のほほんとカメラを向けてたりしてないよ。大事な娘の一大事だからね」

沙帆子は疑いの目を父に向けた。

「パパを疑うのか？ 沙帆子」

幸弘は、わざとらしさの仄見える哀しげな顔をして言う。

そんな父を睨みつけ、沙帆子は佐原の手からアルバムを取り上げると、アルバムをめくって記憶にある写真を探した。

「なら、これはどうなの？ 娘の一歳の誕生日だったっていうのに、パパ、このときも助けようともしないで、娘の不幸を、フラインダー越しに眺めてたんじゃない」

一歳の誕生日。もちろん記憶にないが、この写真がはつきりと事実を物語っている。

「沙帆子のためにこのケーキを買ってきたのは、僕だぞ。それもフルーツ大好きな沙帆子のために、わざわざフルーツケーキが美味しいと評判のケーキ屋さんまで出向いて買ってだな、買ってきたんだ。そいつをお尻でぺしゅんにしたのは沙帆子だぞ。このときは、僕のほうこそ、なぐさめて欲しかったよ」

「そうよ、沙帆子。幸弘さん、ほんとにがっかりしてたわよ」

「カメラですつとシャッターチャンスとちを捉えようとしてたんじゃなきゃ、こんな写真、タイミングよく撮れないと思うけど」

「うーん。そこが、巡り合わせてやつなんだろうなあ」

なぐにが巡り合わせだ。どうやったらこんな、とんでもなく沙帆子のドジっぷりを見せつけるものばかり撮れるのだ。

わたしが取り立ててドジなわけじゃないのに……

幸弘はそういう場面が訪れるのを、カメラを構えてひたすら待っていたとしか思えない。

「いいじゃないか。どれもほのぼのして……お前らしいし……」

お、お前らしい？ 聞き捨てならない佐原の発言に、沙帆子は目を釣り上げた。

「ど、どこがですか？ わたしはですね、こんな、こんな、ドジじゃないですよ！」

「……でもこれ、お前だろ？」

冷静な指摘に、沙帆子はぐうの音も出ない。

「合成写真じゃなくて、実際の写真なわけだしな」

佐原の正論に顔を引きつらせたものの、あっさりと引きたくない。

「だ、だから、パパがそういう場面を狙って、故意に撮ってたわけで……特別ドジなわけじゃなくてですね」

「まあまあ、そんなことどうだっていいじゃないの。ちっちゃな沙帆子。どれもひとつ残らず可愛いんだもん」

「ええ。そうですね」

芙美子の声には笑いがあつたが、佐原の声にはなかった。

沙帆子はアルバムの写真を見ている佐原の眼差しに、どきんとした。

彼の指先は、ご飯粒をほつべたにいっぱいいくつつけて、あつけらかんと笑っている幼い沙帆子の無様な写真に触れていた。

3 ありがた迷惑

「それじゃ、わたしたちはお先に休ませてもらうわね」

アルバムをじっくり眺めている佐原の隣に座り、ホットミルクを口に含んでいた沙帆子は、母の言葉に顔を向けた。

「まあ。そうだな」

妻に立つことを促された幸弘は、しぶしぶといった様子で腰を上げた。

父と母が休むということは、この部屋には沙帆子と佐原だけが残るということで……

いや、それより……佐原はどこで寝るのだ？

その問題は、彼女の知らぬ間に、両親と佐原の間で解決しているというのか？

「啓史君」

心を疑問でいっぱいにして焦っていた沙帆子は、父の声を耳にして視線を佐原に向けた。

父の呼びかけは、アルバムを見続けている佐原の耳には入らなかったようだ。

「啓史君！」

幸弘は一步近づいた上に、先ほどの倍ぐらいの音量で佐原の耳元に向かって呼びかけた。

父ときたら、どうしたのかずいぶん不機嫌そうだ。佐原が呼びかけに気づかなかったくらいのこと、何をそんなにカリカリしているのだ？

佐原は何も言わずにまず顔を上げ、それからおもむるに、「なんですか？」と返事をした。

「わかってるね」

念を押すように父が言う。幸弘の言葉に、佐原が眉を上げた。

どうも、沙帆子と同じで、彼もなんのことか理解できなかったようだ。

「幸弘さんってば、ほらほら、いらぬ心配しなくていいの」

芙美子は、夫の腕を掴んでなだめるように引っ張った。

「芙美子ちゃん、僕はねえ」

幸弘はそこまで言うのと、言葉を止め、自分に顔を向けている佐原を振り返った。

「僕を怒らせないほうがいいよ、啓史君」

「ええ。わかってます」

幸弘の視線をまっすぐに受け止め、佐原ははっきりと答えた。

その返事に満足したのか、気難しい顔で大きく頷いてみせると、幸弘は妻に引きずられるようにして居間から出ていった。

ばたんと閉まったドアを数秒間見つめてから、沙帆子は佐原のほうを向いた。

「先生？」

「なんだ」

すでにアルバムに目を戻していた佐原は、顔も上げずにやたらそっけなく答えた。

ふたりの間に距離を感じ、彼女は戸惑った。

父や母がいたときは、ここまでそっけなくなかったのに……ふたりきりになった途端……どうして？

まるで佐原に嫌われているように感じられて不安が湧き、胸が疼く。

「あ、あの……」

「お前、先に寝てもいいぞ」

さつきと同じくらい……いや、先ほど以上に、その言葉はそっけなく聞こえた。

「でも……」

「明日も学校だし……テストが終わったからって、授業はまだあるんだぞ」

小言のように言う佐原に、沙帆子はむっとした。

「せ、先生だって、学校です」

「俺は慣れる」

慣れるって、徹夜がってことだろうか？

「先生……な、なんか……わたしのこと怒ってるんですか？」

佐原はぐっと眉を寄せて、怪訝そうに沙帆子を見た。

寄り添うように座っていたため、上体を屈めてきた佐原の顔が目の前に迫る。

彼女は思わず身体を後ろに引いて、ふたりの間にささやかな距離を開けた。

「なんで？」

「だ、だって……そう思えるから……」

しどろもどろにそう答えたものの、佐原の顔の近さに動揺し、頭からやりとりの内容がぶっ飛んだ。佐原の手が近づいてきた。哀しい習慣から、沙帆子はおでこをピンタされることを予感して身を硬くした。が、ピンタは飛んでこず、その代わりに佐原の手が彼女の額に触れた。

「お前……なんもわかってない」

え？ ……いい、いったい？

「な、何がですか？ それじゃ、説明してください」

「説明するようなことじゃないからな」

会話を無下に遮断されたように思えて、心が震えた。

「い、意味わかんない」

涙目になった沙帆子を見て、佐原が小さなため息をついた。

「ばーか。泣くことじゃないぞ」

佐原は額に触れていた手で、沙帆子の耳たぶをきゅっと摘み、少し乱暴に左右に振った。

「だ、だって……」

佐原の手はそのまま沙帆子の後頭部に回り、彼女の頭を引き寄せる。トクンと心臓が跳ねた瞬間、唇が重なっていた。

キスは沙帆子を翻弄するとともに、精神を安らがせた。そっけない言葉や態度とは裏腹に、佐原のキスはとてもやさしい……

甘くやさしい長いキスの果てに唇を離れた佐原は、沙帆子の頭を自分の胸に抱き、少し荒くなつた息をなだめるように、大きく息を吸って吐いた。

沙帆子の耳に、佐原の速まった鼓動が聞こえる。

「お前は……」

「は、は……」

「ほんとにわかってない」

「だ、だから……何が……」

「いまはいい」

沙帆子は口を閉じて佐原の言葉の意味を考え、途方に暮れて首を横に振った。

「何がですか？」

「何もかも……」

佐原がまったくわからない。彼女が理解できないことを、佐原は残念に思っているようなのに、言葉にして説明するのを拒んでいる。

どうして？

説明してくれば、きつと理解し合えるのに……そうじゃないのか？

悔しさに唇を噛んで俯いた沙帆子の心情を汲み取っているのか、いないのか、佐原は彼女の背に腕を回し、身体を抱き込むようにしながらアルバムを取り、ふたりの膝の上に置いて開いた。

「先生……」

「見終わるまで黙ってる」

そっけない言葉に、哀しい気分で頬を膨らませた沙帆子は、アルバムを手のひらで叩いた。

「見終わんなくていいですよ……こんなの、こんなの」

「いいから」

やさしく諭すように言われて、沙帆子はその声の響きに思わず口を閉じた。

佐原は沙帆子の思いも知らず、アルバムを熱心に見ている。

なんだかなあ。

ふたりの想いの重みを計る天秤は、沙帆子側にガツコンと傾いている。

ちよこつとやさしく言われただけで、不服を溶かされてる自分……

がっかりだ……

そんな思いを抱きつつも、アルバムの写真を見て時折ページをめくる佐原に、沙帆子は遠慮がちに寄り添い、かなり臆しながら頭を彼の身体に預けた。

なんと言ったのかよくわからなかったが、佐原の声が聞こえた気がした。

沙帆子はゆらゆら揺れる自分の身体を意識した。

身体が浮いている……？

沙帆子は眠い頭をなんとかはつきりさせながら、瞼を開こうとあがいた。

「う……ん」

そう呟いた気がしたが、実際、声になっているのかはわからなかった。

身体がすつと落下する感じがし、ぎよつとした途端、軽い衝撃を背中に感じた。

「わわっ……」

「起きたのか？ そのまま寝る」

起きたのか？ 寝ろ？

言葉が不明瞭に頭の中でこだまする中、何か温かくて柔らかなものが額に触れた。
唇？ ……先生の？

ぼんやりと思案しているうちに、沙帆子の意識は途絶えた。

無意識のうちに寝返りを打った沙帆子は、ふっと眠りから目覚めた。

ここは？

眠気が少し晴れ、沙帆子はうつすらと目を開けた。見慣れた壁が見えた。どうやら自分のベッドに寝ているようだ。

沙帆子はハッとして左右を見回した。

先生？ い、いない！

ベッドは沙帆子ひとりきりだ。

佐原先生……お泊りするんだったよね？

彼女は片肘をついてほんの少し上半身を起こし、ベッドの下に目を向けた。

布団が敷かれている。そして、佐原だろう大きなふくらみがあった。

薄暗くてあまりはつきりとはわからないが、寝ているようだ。

耳を澄ましたけれど、佐原の寝息は聞こえてこなかった。そのとき佐原が寝返りを打ち、彼の顔がこちらに向いた。沙帆子はどきりとして思わず寝たふりをした。

「くそっ」

静かな空間に、佐原の憤りいらいらを含んだ小声が響き、沙帆子の心臓が跳ねた。

な、なんで怒ってるのだ？ それも寝ながら……

続いて、佐原の疲れたような吐息が聞こえた。

眠れないのだろうか？ それで先生、怒ってるの？

眠れないとイライラするものかもしれない。沙帆子はあまり経験がないが……

ならば、話し相手になったほうがいいだろうか？

けど……なんか声をかけづらいかも……

彼女は佐原の様子を窺うかがおうと、ほんのちよつとずつ頭の位置を移動させていった。ベッドの端まで移動して、やっと佐原の様子が見えた。

頭の後ろに両手を当てて、じっと天井を睨にらんでいる。その表情はかなり怖い。

やはり眠れないようだ。不眠症ってやつだろうか？

仕事が忙しすぎて、精神的に参まってるとか？

も、もしかすると、結婚することを後悔してたりするんじゃないや……

結婚するのが嫌になって……でもいまさら断れずに、悩んで眠れないなんてこと、あったり？

あ、あり得るかも……ど、どうしよう……

不安に取りつかれたせいで、喘あえぐような声が、沙帆子の唇から零こぼれ出た。

静かな部屋に、その声はやたら大きく響いた。

「沙帆子？ 起きてるのか？」

返答に困ったものの、寝たふりもできない。

「は、はい。目が覚めちゃって……先生は？　ね、眠れないんですか？」

「……まあな」

ずいぶん間を置いて、佐原が答えた。

「ど、どうして？」

「聞かないほうがいいぞ」

へっ？　聞かないほうがいい？

それってやっぱり……

沙帆子は、がばつと起き上がった。

「先生、結婚、やっぱり、やめたくなっただんですか？」

「はあっ？　なんでそんな考えに飛躍する？」

「だ、だって、眠れないのは悩みがあるからでしょ？」

「悩みはない」

「で、でも……。あ、あの、わたしに何かできることがあれば……そうだ！」

沙帆子はぴよこんとベッドから下り、佐原の布団に膝をついて彼の顔を覗き込んだ。

眠れないときはお酒を飲むに限ると、以前、父が言っていたことがある。

「お酒持つてきましようか？」

沙帆子は勢い込んで言った。

「ばーか」

「ダメですか？　そ、それなら……」

「これ以上飲んだら、保証できないぞ」

「保証？　なんのですか？」

次の案を考えていた沙帆子は、上の空で言った。

「それなら、ママがよくやってくれてたやつがいいかも」

「なんだ？」

沙帆子は佐原の身体ににじり寄り、布団の膨らみの胸のあたりと思えるところをぼんぼんとリズムよく叩き始めた。

「おい、いったいなんの真似だ」

「先生、黙って。騙されたと思って目を瞑ってください。こういう風に身体を叩いてもらおうと、だんだん眠くなるんですよ」

「俺はな、ガキじゃないぞ」

「ガキとか関係ないですよ。先生、いいから目を瞑って、ぜったい効きますから」
「やってられねえ」

佐原は、呆れ返ったように反対側に寝返りを打った。

どうしようか悩んだものの、怒鳴られもしなかったので、沙帆子はぼんぼんと叩き続けた。

佐原がまったく身動きしないまま、五分ほどが経ち、沙帆子は自分が、こっくりこっくり舟をこ

立ち読みサンプル
はここまで

いでいるのに気づいた。動いていたはずの手も止まっている。

「せ、先生い？ 寝ましたあ〜？」

眠たいせいで、ずいぶん間延びした声になった。

佐原の返事はなかった。どうやら寝てしまったようだ。

沙帆子は半開きの目で、思わず会心の笑みを浮かべた。

佐原は馬鹿にしていたが、ちゃんと効き目があったではないか。

彼女はしたり顔で、反対を向いたままの佐原の顔を覗き込んでみた。

目を閉じてる。ちゃんと眠ったみたいだ。

佐原が寝たとわかった途端、沙帆子は大胆な気分になった。彼に対して無意識に持ち続けていた遠慮は、眠たいせいもあって完璧に消え去っていた。沙帆子は佐原の布団に入り込み、彼の背中にぴたりと貼りついた。

「佐原先生え〜、あつたか〜い……先生の匂い……大好きい……」

佐原のぬくもりと彼の匂いは、最高にしあわせな心地を沙帆子に味わわせる。

そのあと、寝ている佐原に向けて、パジャマの好みを聞いたように思うが、それは夢だったのか、はたまた現実か、定かではなかった。

4 あやふやな記憶

「さーほーこ」

母の声に、トントんと小気味いいノックの音が続き、沙帆子はまぶたを薄く開けた。

「はーい」

もう起きる時間？

そういえば、昨夜は寝る前に目覚ましをセットしなかったっけ……

顔を軽くこすりながらそう考えた沙帆子は、ハツとしてベッドの下に顔を向けた。

ふ、布団がある。空だけ……

やっぱり先生、夕べここに寝たよね？

「ママ、先生は？」

沙帆子は、テーブルの上の時計で、時刻を確かめつつドアのところに立っている母に尋ねた。

いつも起きる時間より、かなり早い。

先生だけ先に学校に行くのかな？ それともいったん家に帰って……

「パパと散歩よ。ほら起きて。お弁当も作らないと、時間なくなるわよ」

えっ！ さ、散歩？ な、なんで？